

人間福祉学部 フォーラム 2010 レポート

つながりあう福祉社会を求めて

第1弾 「ひとと関わる仕事 その魅力の光と影」

川池 智子¹⁾ 藤谷 秀¹⁾ 神吉 まゆみ²⁾ 石川 朝美³⁾
浅井 芙美子⁴⁾ 金子 美由樹⁵⁾

要 旨

このレポートは、学生、福祉専門職、教員という三者が合同で企画した初めての人間福祉学部フォーラムの記録を〈編集〉したものである。学生の〈素直な〉発言には、人を援助する仕事、人と関わる仕事を選んだことへの意欲、フレッシュな息吹がこめられている。また、福祉や保育・幼児教育の実践現場の方々は、具体的な実践の事例を通して、人と関わる仕事の「光と影」を語ってくださった。最後に掲載した参加者のコメントにあるように、フォーラム後半のフロアーと登壇者との質疑応答・意見交換も貴重なものであった。このような紀要においては、研究論文こそが高い価値があるというのが一般的なとらえかたである。しかし、普遍的な実践論として確立されるまで至っていない議論の記録は、質的研究の方法論においては極めて価値が高い〈リッチな〉データである。〈リッチな〉データの普遍化としての質的分析は、第2弾、第3弾を経た後になる。

はじめに：フォーラムの趣旨

これまで人間福祉学部では年に1回、講演会を企画してきました。教授会の企画により、全国的に有名な社会福祉の大学教授を外部から招聘し、その講演を学生が拝聴するという、旧来的なスタイルでした。しかし、それで、よいのだろうか、という疑問が、学生たちからの声としてあがってきました。

大学の主役はいうまでもなく学生です。そして、特に社会福祉は学生たちに「当事者主体」「当事者の自己決定」の重要性を教えています。そうだとすれば、カリキュラム外にある講演会は、「学生主体」「学生の自己決定」を大切にしてもいいのではないか、といった意見も学生からでました。

ただし、「当事者主体」「当事者の自己決定」というのは、「当事者だけでやる」ということのみを意味しません。当事者が「支援」を受けて行う決定も十分考えられます。

そこで、今回はじめて、学生と福祉現場の専門職、教員の三者が共に知恵をよせあって、知識と実践と学びの交錯する形のフォーラムを企画しました。大テーマは「つながりあう福祉社会を求めて」。ちょうど「無縁社会」という言葉もマスコミで用いられるようになった頃、社会福祉は、地域でどのような役割を果たしていったらよいか、ということ、山梨のという、一つの地域をフィールドとして、福祉を考える、ということが大きな目的でした。

(所 属)

1) 山梨県立大学人間福祉学部教員

2) 精神保健福祉士(精神科勤務)

3) 貢川進徳幼稚園副園長

4) 山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科学生

5) 山梨県立大学人間福祉学部福祉コミュニティ学科学生

といっても、いっそくとびにそこに行くのではなく、第1弾として「ひとと関わる仕事 その魅力の光と影」というサブ・テーマをつけました。人と関わる仕事は、魅力があるけれども、難しい面もあります。大学では「光」の部分は学びますが、なかなか「影」の部分を学ぶ機会は少ないかもしれない、人と関わる仕事の魅力と難しさを、共に語り合う中で、地域の福祉を支えるどのような専門職になっていったらよいか考えていこうという趣旨です。

まずはパネリストの二人の学生から、なぜ人と関わる仕事である、福祉や保育を学びたいと考えたのか、そして、専門職のお二人からは数十年の専門職の実践を通して、人と関わる仕事の魅力と難しさについて語っていただきました。後半では登壇者だけではなく、フロアーの参加学生、福祉専門職等の皆さんとの意見交換を通して、このテーマを深めていきました。

(人間福祉学部 教員 川池 智子)

1、パネリストの発言

(1) 人間福祉学部 人間形成学科

2年 浅井 美美子

私はまず、保育・福祉を学ぼうとする以前から大きな目標として「人の役に立てる人間になりたい」ということを考えてきました。それは育ってきた環境によるものが大きいと思います。

私は長野県の出身です。両親は共働きで平日は帰りが遅いことが多く、両親の帰宅までは祖父母に面倒をみてもらっていました。近所には子どもが多く、小学校や保育園から帰るとみんなで集まりよく遊びました。私が小さいときには、年上のお姉さんが遊んでくれ、大きくなると、私自身も小さい子を集めて遊んでいました。私が子どもの頃にはこのように、自然な形で異年齢間の交流があったように思います。今になって振り返ると、近所に住む子どもたちとの遊びの中で、社会生活において必要なことを多く学んでいたような気がします。

また、近所の大人の人たちも温かく接してくれました。学校帰りには「おかえり」と声をかけて

くれるなど、すれ違ったらあいさつを交わすというのが当たり前でしたので、一人きりで寂しいと感じることはあまりありませんでした。私は地域の中で育てられてきたと思います。両親以外にも、愛情を注いでくれる人たちがたくさんいたということを実感しています。そのような環境で、私も徐々に人の為に何かをしたいという気持ちが芽生えてきたのかもしれませんが。そういう環境から、保育という仕事をめざしたいと考えるようになったのだと思います。

(2) 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

1年 金子 美由樹

私は福祉について、人間の福利やより良い暮らしを追及する良いものというイメージがありました。しかし、100歳を超えた高齢者の方が戸籍上でのみ存在するというニュースを聞きました。また、家族の方が高齢者の死体を隠してしまう現状もあることも知りました。私は行動に対しての善悪を決めつけるのではなく、何故陥ったのかという背景に焦点を当て、その家族には自分たちの支えになり、胸の内を話せる人がいなかったという背景が存在したことを学びました。そこで私は地域のつながりや人と人との関わりあいが減ってきているのではないかと考えました。

私は“MOTTAINAI”というサークルを今年立ち上げました。“もったいない”の、“もったい”というのは、本来ありがたいものという意味です。人と人との出会いや関わり合いは当たり前だと思われませんが、それは本来ありがたいものです。それらのことを、ボランティアや地域貢献活動などを通して学び、後輩たちに伝えていきたいと考え、行動に移しています。そして、学んだことを将来地元に戻って活かすことができたら良いと思っています。

(3) ソーシャルワーカー 神吉 まゆみ

私は、精神科ソーシャルワーカーをやって25年になります。

保育、それから看護、福祉、医療どれも人と関わる仕事です。しかし、これらは一般のサービス

業と少し違うと思います。何故かと言うと、これらのサービスを好きで選んできたわけではない人、子ども等に関わる仕事なのです。病気も障害も、選んでなったわけではない。保育園の子どもだって入園当初は、お母さんと離れたくないって門で泣く毎日でしょう。仕方なく来ているわけです。

ですから対人援助職をしていると、色んな思いをぶつけられます。様々な思いをぶつけられるので、自分自身も色んな気持ちになります。「つらいのか、怒っているのか、泣きたいのか」自分がどういう気持ちになっているのかをわかっていないと、気持ちが相手の人に伝わったり行動に出てしまいます。そこで、私の所に来る実習生の方には、「実習中に何か起こったときに、そのときにどんな気持ちがしたかということを、よく温めて、解釈しなくていいので、それだけを大事にしてください。」と言います。それが一体何かは卒業後、現場に出てからわかれば良いことです。

例えば、私がまだ若いワーカーだった頃の話です。私の勤めている病院に遠い県から親御さん主導で入院してきた統合失調症の方がいました。今思えばアセスメントが甘かったと思いますが、その方は病識が無く、病院近くのアパートに退院された後、病院に来なくなり、薬を飲まなくなり、閉じこもって何度訪問しても出てこなくなりました。一生懸命その方に関わったつもりでしたが、とうとう最後に親御さんが出てきて、保健所、警察と一緒に踏み込んだら、飲まず食わず、薬も飲まず、死にかけて発見されました。最初、親御さんに「ありがとうございます」と言われましたが、しばらくして電話がかかってきました。一転してその親御さんが、「あなたがいけない、あなたがこういうことにしたんじゃないか」と延々電話をされました。青天の霹靂で悔しくて泣く思いをしました。一生懸命やったことは全然通じず、とても理不尽な気がしました。このようなことは現場に出るとたくさん起こります。

二人目は、長く訪問看護に行っていた方です。精神科は訪問看護にソーシャルワーカーが行けず。色んなこだわりのある方でした。冷蔵庫の掃

除をしたとき、私が物を詰め込み過ぎたから壊れたと言われ、7年くらい経っても、毎日毎日、「冷蔵庫を弁償しろ」という電話をしてきました。電話が1～2か月と続き、恐怖で翌日仕事に行きたくなくなりました。でも乗り越えました。「冷蔵庫のことはどうなったか」「その話は、もう何年前に終わった話じゃん」と、今は話が出来ようになりました。当時は、自分はプロだと思いながらも、何かされたらどうしようなどと怖かった。

嫌なことばかりではありません。三人目は一人暮らしの統合失調症の方、うるさく乱暴な方でしたが少しスケベでした。真夏にトランクス一枚で病院に来て「それはパンツでしょう」と言うと、「いやこれは短パンだ」と言いました。まだ携帯電話をもつ人がそういない時代に、彼は携帯電話を手に入れ、「この電話に俺が出なくなったら見つけてくれ」と言いました。ある日、電話が通じなくなり、行ってみたら亡くなっていました。彼が言った思いを何年か後に実現しました。その時心が通じた気がしました。

最後に紹介するのは、統合失調症の方で、退院後一人暮らしをして、生活保護費の中から大好きな哲学の本などの専門書をいっぱい買い自由を満喫していた人です。その方が癌になりました。最後まで家に居たいということで、ヘルパーさんや訪問看護、色んな人が支えました。最終的に地域の民生委員さんが階段の上でへばっている彼を見つけて入院させました。彼はとにかく本が大事で、「神吉さん、押し入れの中の本を何とかしんどめだね」と言いました。彼が生きている間に聞いた最後の言葉でした。その一週間後ぐらいに亡くなりました。食べる物を削っても本を手元に置きたいという彼の思いを大事にしたから気持ちが通じたのだと思います。ご遺族が遺品を整理された時に、持てるだけの本を貰ってきました。

理不尽で嫌なこともあります。心が通じることもあります。福祉を志す人には、人の役に立ちたいという方は多いけれど、断ることや怒ることは悪いとか思う人も多いかもしれない。しかし、断らなければならないことも自分が怒ることも多い仕事なのです。それに相手の方に役に立ったと

思ってもらえることはそんなに多くはありません。怒り、悔しさ、嫌悪感、無力感などの気持ちを自分の中でわかるようになり、さらにガス抜きができる関係、環境が必要なのです。人と付き合っていくことはとても楽しいことです。しかし慢性の病気のご本人にとっては病院と付き合うのは嫌なことでしょう。長く付き合ううちに、その方が生活を確立して、良かったと思ってくれるのが一番嬉しいことです。

それから、対人援助職は一人で対象の方に関わらず、チームで関わります。現場に出て2～3年位の人は、チームの人との関わりが一番しんどいかもしれません。

(4) 幼稚園副園長 石川 朝美

私は我が子を含め40年程子どもと関わる仕事をしています。昭和41年の山梨県立女子短期大学創立以来、実習協力園として実習生をお受けしてきました。幼稚園での実習＝子どもと関わること。幼稚園、保育所には教科書はありません。しかも、人対人の環境で育てていく。ある意味、人間の生きる力の根っ子の部分を育む貴重な時期だと思います。

この大学に幼児教育学科が出来た頃は、毎年10人前後の実習生が見えました。ほぼ1クラスに1人の実習生、1か月の間に2回位研究保育があったりしました。その頃の実習では、学生さんが生きたザリガニをOHPの上に乘せたり、水着になったのプール指導等ありました。その後、時代とともに、子どもに何か制作をさせるような研究授業が多くなった気がします。そういうものは子どもがどう動くか案外、想像しやすいかもしれません。切って、貼って、仕組んで、そこにとても細かい配慮を考えたり、いろいろな題材を集めたり、学生さんの苦労が見えます。指導案も指導の観点を詳細に書いておられます。1か月の最後の日に研究保育をしますから、寝ずに頑張って書かれたと思います。わずか1時間の保育のために、全身全霊傾けてやっている学生さんの姿は尊敬いたします。ただそこで、指導案を詳細に立てることによって、こういう対処をしたいという自分が

想定した関わり方になってしまうのではないのでしょうか。子どもたちには、詳細な指導案に乗らない動き・発言が活発に出てきます。想定を超えた関わり方を、子どもたちから学ぶことが出来ます。教育現場は1日限りの通過点ではなく、1年、2年、3年と関わる場所です。子ども達の生きる力が、人的・物的環境の中で育まれます。又、人や周りとの関わり方を遊びを通して学ぶ過程を大切にしています。

保護者との関わりは難しいという言葉をよく聞きますが、子どもとの日々の関わりが保護者との関わりを深めていくものと思います。毎日の経験の中で、どうしたらこの子とコミュニケーションが取れるんだろう、関われるんだろう。言葉でのコミュニケーションも難しい幼児期は、まず目を見て、話ができなかったら握手して、遊びを創り上げる楽しさを共感してほしいと思います。

インターネット、携帯などで情報が溢れ、人間関係が希薄になりつつある現在、自分探しをしたり情報を取捨選択する中で、人と関わる職業をめざしている学生さん達を、応援したいと思います。フラットな関係は築きやすい年代だと思います。同世代と繋がりあい、友達同士、小さいグループも築きつつ、さらに上の層や小さい子、障害の方などと繋がり、関われる仕事に向かってほしいと思います。

福祉や教育・その他の職業にしても、人と関わることはとても大切です。そこには光もあり、また思わぬ影も経験するでしょう。光も影も、人との関わりの中で共有し共感することの積み重ねで生きる力になるものと思います。

(5) 人間福祉学部学部長 藤谷 秀

私は哲学が専門なので観念的な話になりますが、皆さんのお話を伺って二つ感じたことを言いたいと思います。

一つは、人と関わるとはどういうことなのかを改めて考えさせられたということです。神吉先生が患者さんに関わる話を、石川先生が子どもたちに関わる仕事についての話をしてくださいました。けれども、人と関わるというのは自分自身が

誰かに関わることが一番問題になります。話を聴いているときは、風景の中にパネラーがいて喋って、その話を聴いているという関係です。そして、自分自身は風景の中には存在していません。ところが、例えば皆さんが意見を言う、手を挙げた瞬間に眺めていた自分ではなくなります。関わりを持つことは、誰かを眺めるのではなく、相手に自分の身をさらすということです。眺めているだけなら相手からは自分は見えていない。テレビを観ているのと同じです。または、本当は見えているけれど、見えていないつもりになっている。けれど、関わる時は相手の相手に自分になる、身をさらす立場に立つということだと思います。例えば、子どもとの関わりであれば、その子にとって、自分は相手になること。患者さんであれば、自分が相手になるということを改めて感じました。そう考えると、やはり関わりは一方的ではあり得ません。

例えば、援助者が援助される人に関わる。あるいは、教育者が子どもに教育をする。一方的な関係で考えがちですが、実はその相手が私に関わってくるわけです。関わっているということは、同時に、相手が自分に対して何かをして、関わってくるということ。場合によっては、関わりの拒絶自体がひとつのメッセージだと思います。必ず相互的な関係にあることを痛感しました。ただ、その相互関係が良いか悪いか、どんなものが良いのか、これは色々だと。困難なことは多くあるけれど、ある良い関係が形成された時、独特の喜びや楽しみがあるのだらうと思いました。

もうひとつは人と関わる仕事ということです。人との関わりだけであれば、友達や家族など誰もが誰かと関わっています。これを特に仕事として捉えたとどうなのかと考えさせられました。特に印象的だったのが、人との関わり無しに成り立つ仕事は一つも無いということです。例えば一人で内職をしていますが、それは誰かから仕事を受けて、成果を出さなきゃいけない。コンビニで「いらっしゃいませ」や「ありがとうございました」などと接客をする。あらゆる仕事は人との関わり抜きにはあり得ないと思います。しかし、例えば福祉

や保育、特に人と関わる仕事はどこが違うのか、とても重要な問題だと思いました。

共通性はあると思います。どんな仕事でも、目標があって、そのための手段として人と関わっている。例えば、コンビニのレジでお客さんを相手にするのは、売上を出す手段として関わっている訳です。ニコリするのも、そのほうが商品を買ってくれるという目的があるわけです。同じように、幼稚園で子どもたちと関わるのは、子どもの健やかな発達だとか、あるいは病院でソーシャルワーカーとして患者さんと関わるのは、その人が困難を軽減して社会生活を営んでいけるという目的のための手段としてある。目的の違いはあるけれど、人との関わりが仕事になるという点では共通かなと思いました。けれど、特に人と関わる仕事はそれに尽くせない意味があるのではないかと思います。

これに関連しますが“コミュニケーション”という言葉は、もともとは中世ヨーロッパのラテン語の“コムニカツィオ”という言葉からきています。コムニカツィオというのは“コムニコ”という動詞で、大きく言うと二つの意味があります。一つは、伝えるという意味です。英語でもコミュニケーションで伝達する、伝える。コミュニケーションツールと言うと、何かある意思や情報を伝えるための手段です。この意味でコミュニケーションはよく使われます。もう一つはあるものを複数の人が分かち合う、共有するという意味です。私は福祉や保育の仕事は後者に近いという気がします。もともと一人ひとり違った時間や空間を生きていますが、それがあるときに分かち合えたと感じられる仕事だと思います。コンビニで「ありがとうございます。」も、世界の共有と言えなくはないけれども、やはり特に福祉や保育の仕事は、より世界を共有する喜び、魅力があるのではないかと感じました。

2、意見交換

(1) モデレーターの導入 (川池智子)

今、一般的に、若い人の中には、人との関わり方がじょうずではない人が増えてきているのでは

ないかといわれています。個人的には、同じ世代では気楽に関わることができて、異世代の関わりが難しい人が増えているのではないかということも感じます。それを科学的に実証していつているわけではありません。このことはあくまでも長い大学教育の経験からの「仮説」です。

コミュニケーションそのものからは外れる話かもしれませんが、自分の本音をなかなか出されない。皆さんの実習先でも、実習生が、叱られないように、失敗しないように、それから「できませんとは言いたくない」という学生が増えているという声も聞きます。

授業をしていても、広い教室だとみんなたいてい一番後ろの方に座り、教員が話している様子を、あたかも風景を見るように、自分とは関係無いといった様子の人がふえたように感じることもあります。仲間との密着は強いけれど、それ以外はすぐ風景に投げ込まれてしまうような感覚、それは私だけが感じていることでしょうか。

携帯、情報社会で、スイッチオン・オフが上手なのかもしれません。しかたがないことでしょうか。

社会福祉や保育の仕事は、障がいをもつ方や高齢者の方、保育の中でも子どもだけではなく、自分と年代の違う親御さんと関わることになります。よい言葉ではないし、私は使いたくありませんが「モンスターペアレンツ」といわれるような方々とも関わることもあります。自分の今までいた世界では決してつきあわなかった方とも出会うのです。そういった時に、仲間とはうまくやれるけれど、それ以外の人は関係ない、といった限られた人とのコミュニケーションのなかだけにいたら、それは若い人たちのせいではないのですが、これで大丈夫かなあ、と、心配になります。でも、仕事となれば、ちゃんとやれるということかもしれません。このようなことについても若い皆さんと意見交換したいです。

(2) 発言者①社会福祉専門職は、普段の生活でも専門職の倫理を守るべきか？

先日、仕事が終わった後に、彼女とお店にご飯

を食べに行きました。そこで他のお客さんから絡まれました。僕はその方が、ちょっと病的だなと感じました。ただ、突っぱねるわけにもいかず、さあどうしたものかと。自分が福祉を勉強して、仕事の間は、たとえ1年目の者でもプロとしての自覚を持たなきゃいけないと常々思うのですが、仕事が終わった後に、一般の人間としてお店に行って、他のお客さんに気を遣いたくない。本当にやめてほしいと思いました。僕は、どの程度線引きをして対処すべきなのかわからず、自分がイラッとしてしまったことに対して、自責の念もあり、専門職としてどうなの？と悩んでいます。そういう人と関わりを持たなきゃいけなくなった状況では、どのようにされているのか、どうしたら良いのかお聞きしたいです。(卒業生、福祉施設勤務)

●ソーシャルワーカーからの意見(神吉)

イラッとしたのは当たり前だと思います。イラッとした自分を認めてあげたらいい。福祉専門職だからプライベートでも良い人でなきゃいけないことは、全然ありません。確かに福祉専門職を長くやってると、話しかけられやすいというのはありますが。プライベートで何を優先するかっていうのは自由で良いと思います。福祉職でなくても、他の人の価値観をちゃんと理解しようという人と、そうじゃない人が世の中にはいますから、福祉職に限ったことじゃないと思います。

(3) 発言者②近年の学生のコミュニケーション

この学校で長く、非常勤の教員をやっていますが、その間、学生諸君から質問があったことは一度もありません。発言があったのは、ただ2回。「レポートは何枚書きゃ良いんですか？」って。「百枚だろうと三枚だろうと、好きなように書きなさい」と言った。「あなたはなぜ大学へ来たのか？あなたはなぜこの学校を選んだのか？」そしたら、かなりの人が人と関わる仕事がしたいって言う。大丈夫かなと思うんです。さっき藤谷さんがおっしゃったように、人と関わりの無い仕事なんか無い。そして人と関わることは、実はうんと面倒な

ことなんです。良いことと嫌なことをみれば、良くて半々。それがコミュニケーションです。コミュニケーションっていうのは、ペラペラしゃべったり、人と仲良くすることじゃないですよ。人と争って、傷つけ合って、初めて何か少しわかる。出席カードには良いこと書いてあります。「感動した」「涙が止まらなかった」「先週の授業のあの余韻を持ってまたここへ来ました」等々。しっかり聴いてるんです。じゃあ、なんでそれを教室で発表してくれないのか。発表すれば、それが共有される。コミュニケーションというのは、共に伝えあうことです。だから、「私はこう思う」、「私はこう思う」と、言葉でものを言うっていうことは大事だと思うんです。数人の友達同士では楽しそうに話しているんだけど、公の場で発言しない。言語というものは、コミュニケーションっていうものはパブリックなものです。このパブリックな能力が無いと、世の中生きていけない。

●学生からの意見(福祉コミュニティ学科 4年)

僕は精神保健福祉士コースを取ってます。実習が終わってみんなで分かち合いの場を設けたときに、まったく意見も感想も何も出てこなくて。僕がそのとき司会をしていたので、一方的に一人でしゃべった感じになってしまった。そういう場でも伝えたいこととか思いとかはたくさんあるんですけど、勇気が無いとか恥ずかしいっていう気持ちはどうしても強い。私だったらこうする、とか、僕だったらこうするっていうのがもしあったら教えてください。

●ソーシャルワーカーの意見(神吉)

対人援助職というのは〈自分自身〉をツールとして使う仕事です。自分を閉ざして接すると、相手も閉ざしてしまうので仕事にならない。イメージとしては、自分の幅を広げる、底を深くすると良い仕事ができると思います。ただし全部自分をそのまま出してしまうとそれはそれでつらくなるので、どこかに境界を設けたりはします。本当の自分を全部さらけ出すことはなくて、プライベートはプライベートでとっておくっていうの

は、あって良いと思うんです。また仲間とか同僚とかで支え合ったりもします。

(4) 発言者③ “モンスターペアレント” のこと

“モンスターペアレント”について、どれくらいいるのか、その中で対応が一番大変なものはどんな方が聞きたいです。(人間形成学科学生)

●幼稚園教諭の意見(石川)

その言葉は、メディアにもいっぱい取り上げられているのでこの頃よく聞きます。私は、その質問には「今まで経験がありません」と答えたいです。“モンスターペアレント”がいないではなく、そういう現象であって、困っているのは親御さんの方だと思います。教員側はそういうふうに感じてしまうかもしれないけれど、親御さんのほうからしてみれば、「どういうふうに先生に言ったらわかってもらえるんだろう」、「うちの子どものここが先生にはわかってないのかなあ、わかってほしいなあ」というようないろいろな理由があるのです。言葉遣いやノートに書かれたことが、少々きつい言葉だと思われるようなものかもしれませんが、「先生、うちの子もっと見てよ」とか「先生、私の、親の悲鳴を聴いてよ」みたいなものがあるんじゃないかなと。私の園では、そんなとらえかたをしています。けれども通常では考えられないような要求をされることも現実にはあります。例えば、運動会でもマーチング、太鼓などがあります。今は、先生が指揮をとっているから子どもの指揮者はないですが、昔は子どもを指揮者にしました。その時、「うちの子どもをなぜ指揮者にしてくれないんですか?」「音楽教室も行ってるし、音感の良いし、背は大きいし、すごい良くできる子なので」ということを言われました。でも、そのような親御さんは、それだけを望んでいるのではなくて、うちの子が頑張っていることをもっと先生気づいてよというメッセージじゃないかなというふうにも受けとめてきました。

(5) 発言者④障がいをもつ子や親との関わり

母親が保育士をしています。クラスのお子さん

の中で、足がもたついてうまく歩けない子がいて、病院に行ったら、障害だと判断されたらしく、親もあまり受け止められていないようで、子どもの対応も、保育士の先生たちが戸惑っているそうです。そういう障害を持っているお子さんにはどのように接したら良いのか、教えてください。(高校3年生)

●幼稚園教諭の意見(石川)

特別支援教育も含めて、諸々の事情というものがありまして、こういうふうにしたら良いというような言葉はちょっと見つかりません。ただそれが幼児期であることと、そこにお医者さまが関わっていることは、とてもよいことじゃないかと思います。保育士さん含め病院の方々、それからリハビリの方々とか、関係機関がいっぱい増えてきています。広がっていった支援の中で、じゃあ幼稚園では、保育園では、どういうふうに関われば良いんでしょうかというのを、お母さまを通してそれぞれの専門家にお聞きになって対処していくのが良いんじゃないでしょうか。

●施設職員の意見

現在は、精神障害の方たちと一緒に働かせてもらっています。相談をもらったときに、最初から答えを押し付けてはいけない、まず悩んでいることをゆっくり聴いて、そのことに頷いて共感してあげなさいと、指導を受けています。どうしても、アドバイスのになっちゃったり、自分の考えを押し付けてしまったりということが前面に出してしまうので、気をつけながら日々過ごしています。

(6) 発言者⑤世間の偏見

作業所で働いている者です。いざ社会に出ようとするときに、やっぱり、世間の偏見が気になってしまうというか、障害に対しての理解が少なすぎると思うんです。もっとオープンな社会をつくってほしいと思うんですが、どうでしょうか。(障がいをもつ当事者)

●ソーシャルワーカーの意見(神吉)

偏見が強くて理解がもっとあればとおっしゃっていただいたんですけども、確かに強いですね。アパートを探すにしても、就職をするにしても強いです。けれども当事者で精神保健福祉士を取って、精神保健福祉士になっている人もいれば、ヘルパーの資格を取ってヘルパーをやっている人もいます。当事者だからわかる部分、当事者だから引く張られてしまう、思いに引きずられてしまう部分。どっちもあると思うんです。良いことをうまく使えば良い。弱みになるなっているところは抑えていけば良い。当事者でなくても、自分がイラっとしやすい性格だとか、どうしても断れない性格だとかと同じように、当事者であることを強みにして仕事をされていけば良いんじゃないかと思います。もう一つ、私が就職した頃に比べて、支援をする場所や人がずっと増えてきたような気がします。最近、本当にいろんな人が関わってくれるようになって、支援者が一人で背負わなくても良いような時代に、少しずつなりつつあると思うんです。

(7) コミュニケーションに関する意見

①学生から(福祉コミュニティ学科)

介護を専攻していて夏に実習に行きました。以前はコミュニケーションは会話というイメージがあったのですが、高齢者と関わっているときに、利用者さんの手を握ったりとか、隣に座って寄り添っていたり、そうするだけで、話をしてくれなかった人が話をしてくれたりとか、今まで無表情だった人が笑ってくれたりとか、すごく嬉しくて、そういうの大切なんだと、それもコミュニケーションって言えるんじゃないかと思いました。あと、実習中に、職員の方が利用者の方とすっごく自然な会話で世間話をしてたんです。1日が終わって、利用者さんが帰ったあとにミーティングがあるんですけど話していた職員の方が、その利用者さんの体調とか、相手が何を望んでいるのかとか、相手の精神的な状態とかを的確に指摘されて、自然な会話としか思ってたなかったのに、相手をきちんと見られていたことに感心しました。私

も大学で学ぶ中で、そういうことも身に付けていきたいです。

②訪問介護事業所職員から

コミュニケーションっていうのは、赤ちゃんの声だけでお母さんは「あ、おむつだ」「あ、お腹が空いているんだ」と察知する、そういう非言語的なことから始まっているんですよね。皆さんはものすごく高い知識を持っていらっしゃるんですが、現場に出たら、教科書通りの、授業で習ったような現場とかほど遠く、結構挫折を感じられることも多いかもしれません。ダメだなんていうときに、もう一人の自分を見つけてもらいたい。冷静に考えて、客観的な自分を見つけてもらいたいって思うんです。自分がどうしてこの仕事を選んだかっていうところに戻ってもらうというのが希望です。たくさんの若い人たちに、介護の仕事をさせていただきたくてなっていると思います。

③福祉施設職員

私も指導員として当事者さんと一緒に毎日を過ごしています。自分からコミュニケーションを取ろうというよりも、相手のコミュニケーションを引き出せるように私たちは会話を心掛けています。その人が何を考えて、どういうことを望んでいるかなということを聴いて、それに沿って指導するのであって、本人たちが何を、どうありたいかということを大切にしたいと思って、四苦八苦しています。

(8) モデレーターのまとめ (川池)

福祉・保育のプロの方々プロの「卵」の学生たち、そして彼ら彼女らを育てる教育、高校生、地域の人たちなど、様々な方々からいろいろなメッセージが寄せられました。人と関わる仕事は素敵なんだな、深いんだなということを感じていただけたかなと思います。自分の身近な人だけでなくいろいろな世代多様な人たちと関わる中で、豊かなコミュニケーションの力は生まれてくる。いろいろな考えの人たちを否定しないで、受け入れていく、と同時に対等に互いの意見を遠慮せずに交

しあうこと、その基盤になるものが、ふだんの豊かなコミュニケーションなのではないかと考えました。今日のご参加、どうもありがとうございます。

3、参加者の感想

以下は、参加者から寄せられたコメントです。すべてを掲載する紙面がありませんので、代表的な意見を収録しました。

(1) 在学生からの感想

①「人と関わらない仕事などない」というのは、考えてみれば当たり前ですが、きっとこのフォーラムにいた多くの人になかなか気づけないことなのではないでしょうか。そのくらい福祉という仕事は色んな人と関わったり向きあったりすることが当たり前であり、イメージとしてつながっていると思います。今回、テーマである「光と影」の影の部分が多く話して下さったことが私にとっては嬉しいことでした。何事も良い部分しか見ていないとなると、人間はだめになると思っているからです。

②自分の気持ちを隠したり、忘れたりなどする必要はなくて、認めることも大切なんだと思った。福祉専門職である前にただの人間なのだからいろいろな感情をもつことは当たり前だということがわかった。

③人とかかわるという事について様々な職についている方々のお話を聞くことができて良かった。年齢によってかわり方を変えていくことが必要ではあるけれど、聴く姿勢をもつことが大切なのだと分かりました。人によって意見は様々でしたが、自分が一番合うと思った事、納得できる事だけでなく、そうではない考え方もあるのだという事を頭において生きていきたいと思いました。

④「人とかかわる」ことは絶対にこうすれば良いというものではないと思いました。人には得意不得意があると思うから、コミュニケーションをとるということも得意な人もいれば苦手な人もいて、簡単に言うことはできないものだと思います。人の役に立つということや、人とかかわることとはとても難しいことだと感じました。

⑤幼稚園や保育園での実習を通して子どもや保育者と関わる中で、人と関わることの難しさを感じたこともある一方で、一緒に喜びや楽しさを味わうこともできる素敵な仕事であると思った。保育の分野だけでなく、どの分野においても、人と接することができる仕事というのは自分自身を大きく成長させてくれるものだろうと感じた。

⑥今の自分を、かかわり方が上手な自分に変えていきたいと思いました。かかわりなしに生きてはいけないし、より深いかかわりがあってこそ、生きるのは楽しくなると思うからです。はずかしい、自信がないという気持ちでおさえなくて前に進んでいこうと思います。子どもに対して、友達に対して、大人に対して、1人の人間として相手に自分を分かってもらえるような話し方を心がけようと思いました。

⑦今日は福祉についての話が多いのかなと思ったのですが、幼稚園の先生の話も聞けてすごく良かったです。感じることはたくさんありましたが、その中でも1番印象に残ったのは、「実習生は失敗してもいいのよ」という言葉。実習をひかえている私にとってはとても心強いものでした。昔に比べて、地域との関わりがうすくなっているとか、情報源が増えたとか、モンスターペアレントが出てきたとか、社会は常に動いています。それに対応するか、難しいけど、考えるべきだと思いました。

⑧私が目指している保育士とか福祉の職業は、人対人の職業で、凄く深く人と関わらなくてはいけないものなのだなと思いました。そしてそのような関わりの中では楽しいことや嬉しいこともある反面、辛いことも多いのだなと実感しました。事例を元に話して頂けたので現実を知れて良い機会になりました。人と関わる職業が向いているのかなと不安になることも多いのですが、やりがいのある仕事なんだということがよりわかりました。このような人と関わる職業に就くために、自分の意見を言う力、相手の話を聴く力、人と関わる力をつけていきたいと思いました。

⑨お話の中で実習生の質が変わったと言われていました。私も実習の中で失敗しないように、先生

に注意されないようにということをとっても考えます。失敗したからこそ気付く、注意されたから分かることもあると思っていても失敗したくない、批判されたくないと考えてしまうのはなぜだろうとあらためて考えてみたいと思いました。今日は、全体を通して、もっと積極的に人と関わっていかねばいけないと感じました。

(2) 高校生からの感想

①実際にその職業に就いている方からお話を聞き、視野が広がり、コミュニケーションについて深く考えさせられました。また、会場の様々な方の意見を聞くことによって、自分も考える機会になり、自ら考えることの大切さを学びました。そして、発言することの大事さと自分もそういう人間になり、社会に積極的に参加できるようになりたいと思いました。

②今回のフォーラムに参加できてよかったと思います。ソーシャルワーカーの方や保育のプロの方の話を聞いていて、とても参考になる考え方、仕事への向かい方をしていच्छるのだなあと思いました。しかし、一番感動、感心したのは後半のディベートの時間です。私の学校でもそうですが、今の若者の特徴というのか、少ない人数で話し合うことはできますし、すごいと思う意見があるのに、発表の場になると誰も発表しません。それは私も同じです。けれども今日は次々と意見や質問があがってすごいと思いました。またこのような場があったら参加したいです。

③介護についての話を聞く機会は母や身内からしかなかったので、介護を仕事としている人からの話が聞けて良かったです。コミュニケーションについて触れる話が多かったように感じますが、コミュニケーションはgive & takeだと思うので、ヘルパーなど介護関連の職業のうえで、心を開いて接することで、相互関係が上手くとれるのだなあと納得しました。人は支え合って生きていくことは当たり前のことだと思います。社会のつながりで、“1人”という環境を減らしていくことが大切だと思いました。

（３）福祉関係者からの感想

①コミュニケーションについてゆっくり考えることができました。一方的にならず、共有し、伝え合う事をもう１度確認し、また現場で頑張りたいと思います。人間だから喜怒哀楽を大いに感じていいと思います。ストレス発散方法を持ちながら、自分らしく人とかかわっていききたいと思います。

②自分は人見知りがあり、昔からコミュニケーションが得意ではありませんでした。しかし、福祉の仕事につき、もっとコミュニケーションがうまくなりたいと思い参加しました。そして、先生方や会場のみなさんの話を聞いて、こんな考え方があるのかと思い、とても勉強になりました。

③将来を担う若者の育つ環境を知ることができてとても良かったです。人とのつながり、めんどくさいんだよね。みんな事なかれなんだよね。誰かがやれば、誰かがしゃべれば、おもしろいなあって、それだけ。つまり受け身。自分と相手、個人的なつながりをもたないでも相手とつながれるのがプロかプロでないかの分かれ目だと思う。

④実習に来て、利用者さんに何も話しかけられない学生さん、職員に質問できない学生さんも事実多いです。あいさつだけでもいい、わからない時はきいてほしいのです。やはりコミュニケーションが大切だと思います。

（４）保育関係者からの感想

①去年新社会人として保育園に就職し、コミュニケーションをとることの本当の難しさを感じながら１年がすぎようとしています。子どもたちや親との距離感、また一緒に働く先生方との対話など、自分だけの力だけでは成り立たず経験もないので本当に欠かせないものだと思います。けれどこの１年で子どもたちと築けてきたものはあると思っています。なぜ選んだのかを忘れずにこれからも仕事がんばりたいと思います。

②あらゆる福祉関係の御世話になっていますが、出てくる思いは「感謝」です。保育も精神病患者も本人はわかっていなくてもその相手は１人であり１人でなく家族も一緒です。「相手（患者や子

ども）の立場になり関われる人」というのが大切だと痛感しています。求めている方の立場になると「関わり方」も自ずと見えてくると思います。

③人と関わる仕事に就くまでは、コミュニケーションについて考えたことはそんなになかったが、今日のような機会に、様々な事例や職業から、いろいろな視点で人との関わりを考えることができた。保育の中でも、子どもたちのストレートな気持ち、考え方に大きく影響されていると感じる。保育者は無償の働きかけをされると言われるが、子どもたちからも気づかされること、学ぶことがたくさんあり、保育者と子どもの間にもしっかりと相互の関係が生まれていると思った。明日からの保育で、今日知ったことを少しでも実践していければと思う。

（５）一般の参加者からの感想

①福祉の仕事は、自分を犠牲にする部分が多いイメージだった。相手を否定したり、嫌悪感を抱く事ができないと思った。けれど、そう感じてしまう事は「当たり前」という意見があっただけだった。その上で、仕事として業務をこなしていく方々の精神力の強さはすごいと思った。（付近の住民）

②病院に勤務する一職員として、一人の人間として、コミュニケーションの大切さを学びました。自分をさらけだす、相手の話をまずよく聞き、共感する。とても重要なことですね。言葉だけでなく、行動やアイコンタクトでもコミュニケーションをとれることも実感しました。（病院関係）

③何か起こった時の自分の気持ちを自覚すること、大切ににあたためること、そして上手にガス抜きすること。これが毎日を健やかに生活していく上で大事であると実感しています。以前は上手く出来ませんでした…。コミュニケーションは相手を受け入れることから始まるのだと思っています。（高校生の保護者）

④人と関わる事は、毎日、勉強だと思います。ここにきて同じ時間をともにする仲間とは、現、今言いたい事が言える仲間です。学生さんに関わる事がありますが友だちと普通に話し、一緒に力をあわせて何かやっていけば、コミュニケーション

ンを取れるようになるのではと思いました。(ボランティア、自立支援員)

むすびとして

あらためて、フォーラムのまとめをしてみると、実践現場からの深いメッセージ、学生の気づき、参加者相互のコミュニケーションから生まれた知恵、フォーラムの感想にこめられた思い、珠玉の言葉の数々に驚かされました。

知識は本にも、インターネット上にもたくさん流れています。しかし、そこから「知恵」を生み出すためには、人と人がフェイスツーフェイスで向きあい、一定程度、心をオープンにし、できるだけ「対等」に、自分がこれまで得た既存の知や体験から得たものをぶつけあい、練りあわせ、昇華させていく作業が必要なのかもしれません。時間がかかります。一回だけですみません。つまり、このフォーラムのような体験を積み重ねていくことも福祉・保育・幼児教育を学ぶ学生たちに

重要な学びなのです。私が知る範囲では、教育の中でこのような試みを重視している例は、あまりありませんが、むしろ、「人と関わる仕事」をめざす学生たちには、不可欠な教育のあり方の一つであると、私は考えています。そしてこの記録は質的研究の視点からも貴重なものです。

最後に、このフォーラムのテープおこしや整理、コメントのまとめ等は、二塚綾さん（甲府市社会福祉協議会）、そして柴草綾乃さん、浅井芙美子さん、鈴木一美さんなど本学部の学生が〈参画〉してくださってつくりあげることができたことを記し、感謝の意を表します。また、このフォーラムに、参画して下さった福祉・保育の現場の方々、学生の皆様のおかげです。皆様にも「参画」して下さったことを深く感謝します。ありがとうございました。（川池智子）

実施日時：平成23年2月5日（土）

場所：山梨県立大学 飯田キャンパス講堂

Faculty of Human and Social Services, A Report on Forum 2011: For Well-being Society and Good Human Relations

“A Wide Appeal of Work Concerned with People, Based on Positive and Negative View”

KAWAIKE Tomoko, FUJITANI Shu, KANKI Mayumi
ISHIKAWA Tomomi, ASAI Fumiko, KANEKO Miyuki

Abstract

This report is a record of the first forum of the Faculty of Human Welfare that was planned and completed by three parties: students, welfare professionals, and teachers. The comments of the students show the passion with which they chose professions that help people and get them involved with people. Furthermore, the practitioners in the fields of welfare, nursing care, and preschool education told the participants about the light and shadow of professions that get them involved with people. The questions and answers and discussions between the panelists and participants are also valuable. There is a tendency to view only research papers as having high value. However, the record of discussions, which has not yet been turned into a general theory of practice, also includes a wealth of information that is extremely valuable from the viewpoint of methodology of qualitative research. Generalization and qualitative analysis will be conducted after the second and third forums.